様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月２７日現在

機関番号：13101
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７２０１１９
研究課題名　宋代詩文中の「三国志物語」を手がかりとした『三国志演義』形成過程の研究
研究課題名　Studies on the formation process of the Sanguo zhi yanyi：With reference to the poetry and prose of the Song dynasty about "Story of the Three Kingdoms"
研究代表者
角谷　聰（KAKUTANI　SATOSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90444182

研究成果の概要（和文）：研究の基礎的段階として、宋代の代表的な文人の詩文集を調査対象文献に用い、「三国志物語」呼称データベースの補完作業を遂行した。また同時に、各種「三国志物語」を抽出する過程において、「三顧茅廬故事」の形成過程に関する新たな視点を見出すに至り、「「三国志物語」の形成―三顧茅廬故事を中心として―」を査読付き論文として公開するに至った。更に、「全宋詩分析系統」、「唐宋史料筆記叢刊」、「元明史料筆記叢刊」、「歴代詩話」、「歴代賦彙」等の各種データベースを活用した「三国志物語」の資料収集を実施した。

研究成果の概要（英文）：On the foundation stage of the study, I investigated with using the poetry and prose collection of typical literati of the Song dynasty, and complemented the database of nicknames about "Story of the Three Kingdoms". At the same time, in the course of extracting the various materials about "Story of the Three Kingdoms", I found out a new perspective on the formation process of the story about Sangu Maolu (Three visits to the thatched cottage), and published as a peer-reviewed paper titled "The formation process of 'Story of the Three Kingdoms': with a focus on Sangu Maolu". In addition, by using the various databases, such as "Quan Songshi fenxi xitong","Tang Song shiliao biji congkan","Yuan Ming shiliao biji congkan","Lidai shihua" and "Lidai fuhui", I collected the materials of "Story of the Three Kingdoms".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	400,000	120,000	520,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：中国文学

１．研究開始当初の背景

今日、日本や中国のみならず世界中に広範な愛読者を有する小説『三国志演義』は、渡邉義浩著『三国志研究入門』（日外アソシエーツ、2007 年）に、「長い時間をかけて講談や語りものとして作りあげられてきた三国に関する説話を、羅貫中という小説家がまとめたもの」と記されているように、一個人の創作によって、ある時期に突如として出現した文学作品では決してない。また、その作者

と目されている羅貫中も、彼と同時代、或いはそれ以前に存在していた数々の三国志に関する逸話をもとに、一冊の長編小説へとまとめ上げた、謂わば編纂者の一人に過ぎない。そして、『三国志』と『三国志演義』を比較した際に見られる数々の虚構や人物形象の改変は、両者の間に横たわる千年以上の時間の中で次第に熟成されたものと言える。ただし、この間の三国志にまつわる逸話を体系的にまとめた資料は現存しておらず、従って『三国志演義』の形成過程に関する全面的な解明は今日に至るまで成されていないのが現状である。

そこで、研究代表者はこれまでに様々な文献資料の中から、『三国志演義』に登場する人物について書かれた断片的な記述（以下、これを「三国志物語」と称す）を逐一蒐集し、これらの整理・検討を行ってきた。これまでに調査対象とした資料は、唐代の歴史を記した『旧唐書』並びに『新唐書』、唐代の詩を集大成した『全唐詩』、及び唐以前の文言小説を収録した最大規模の類書である『太平広記』等である。そして、引き続き 10 世紀後半の宋代以降における「三国志物語」についても、地方志などを手がかりとして漸次調査を進めているが、これまでに行ってきた宋代文献の調査は、決して全面的なものとは言えない。宋代に入ると、文芸の担い手である文人層の増大や、印刷技術の発達などに起因して、現存する文献資料が膨大な量となり、唐代の資料に対して行ってきたものと同質の網羅的な調査を遂行するには、多大な困難を伴うのが実情である。

こうした現状を鑑みて本研究では、近年陸続と世に出されつつある電子媒体の漢籍データベースを活用し、紙媒体による目視調査と電子検索とを融合する形で、膨大な資料群の中から効率的且つ網羅的な資料蒐集を行い、そうして集積された資料を丹念に読解することで、宋代における「三国志物語」の全容解明を企図するものである。

２．研究の目的

本研究は、３世紀に中国・西晋の陳寿が史書『三国志』を編纂して以来、千年以上の時間の中で複雑な変遷の経過を辿った後、明代中葉（16 世紀）に小説として『三国志演義』が形成されるに至るまでの過程を究明すべく、両者の間に位置する宋代（10 世紀～13 世紀）の文献資料を手がかりとしてその一端の解明を試みるものである。

研究代表者が現在に至るまで取り組み、また今後最終的に究明しようとしている課題は、直接的には小説『三国志演義』が成立するに至った過程の全貌を明らかとすることである。そして、これは広い視点から見た場合、『三国志』と『三国志演義』を一つのモデルケースとした、歴史書から小説が生み出される過程、換言すれば、事実の描写が前提とされる史書の記述から、小説の必須要素とも言える虚構が生成される過程を究明するという、小説成立の構造的問題とも密接な関わりを有している。こうした文学上の大きな課題を考える一つの糸口として、本研究では『三国志演義』の成立過程、中でも『三国志演義』の形成に重要な影響を与えたと推測される宋という一時代に範囲を絞って、「三国志物語」の様相を明らかにすることを目的としている。

本研究に先行して「三国志物語」の蒐集を行っている代表的著作が二点存在する。一点は王瑞功主編『諸葛亮研究集成』（斉魯書社、1997 年）であり、もう一点は朱一玄・劉毓忱編『三国演義資料彙編』（南開大学出版社、2003 年）である。前者は、三国時代を生きた許多の英雄のうち、諸葛亮一人を対象とした資料集成としては大部の研究成果であるが、『三国志演義』に登場する諸葛亮以外の人物は調査対象となっておらず、且つ研究代表者が過去に唐代の資料の中から見出した、諸葛亮に関する記事の幾つかが本書には収められていないなど、必ずしも十全のものとは言えない。また後者は、『三国志演義』に見える人物を幅広く扱っているが、例えば研究代表者がこれまでに『全唐詩』を調査対象として、三国時代の人物が詠じられた詩を 600 首以上抽出したのに対して、同書には僅か 130 首しか収録されていないなど、両書共に各時代・各登場人物にまつわる「三国志物語」を網羅的に蒐集しているとは言い難いのが現状である。これに対して本研究は、各時代のあらゆる文献から資料蒐集を行い、且つ『三国志演義』に見られる登場人物をすべて抽出の対象としているなど、先行する研究には見られない全面的で網羅的な「三国志物語」集積を目指している点が大きな特色である。

本研究を通して、宋代の文献資料における「三国志物語」が全面的に蒐集されるとともに、これらの資料を読み解くことによって『三国志演義』の成立過程において極めて重要な一時代を担ったと考えられる宋代の「三国志物語」の様相が、先行研究に比してより全面的に解明できることとなる。そして、宋代の文献資料における「三国志物語」の究明は、これまでに集積した唐代資料との連続性の検証や、宋に続く金・元代の「三国志物語」の実態を探る上でも、基礎的且つ発展性を有する内容であると言える。

３．研究の方法

(1)呼称データベースの補完

電子検索システムを用いて「三国志物語」の蒐集作業を行うに先立ち、検索項目の選定、

即ち三国時代の人物に対して用いられる呼称の予備調査が必要となる。そこで、まずは宋代の代表的な文人十数名を取り挙げ、文献の目視による精査を行うことで「三国志物語」を抽出すると同時に、その中で用いられている呼称の調査を行い、人物呼称データベースの補完作業に取り組む。ここで調査対象とする文人、並びに使用テキストは次の通りである。

・欧陽修（『欧陽修全集』中華書局、2001 年）
・曾鞏（『曾鞏集』中華書局、2004 年）
・王安石（『王荊文公詩箋注』中華書局、1958 年）
・蘇洵（『嘉祐集箋注』上海古籍出版社、1998 年）
・蘇軾（『蘇軾詩集合注』上海古籍出版社、2001 年）
・蘇軾（『蘇軾詞編年校注』中華書局、2002 年）
・蘇軾（『蘇軾文集』中華書局、2004 年）
・蘇轍（『蘇轍集』中華書局、2004 年）
・黄庭堅（『黄庭堅詩集注』中華書局、2003 年）
・張耒（『張耒集』中華書局、1990 年）
・王十朋（『王十朋全集』上海古籍出版社、1998 年）
・陳与義（『陳与義集』中華書局、2007 年）
・陸游（『劍南詩稿校注』上海古籍出版社、2005 年）
・范成大（『范石湖集』上海古籍出版社、2006 年）
・文天祥（『文天祥全集』中国書店、1985 年）

研究代表者がこれまでに唐代の文献を調査することで蓄積してきた「三国志物語」の呼称データベースを基礎として、上記作業に基づき抽出できた新たな呼称のデータを追加することにより、呼称データベースの補完作業を行う。その際、唐以前から用いられていた呼称と、宋以降に初めて見られるようになった呼称を区別して整理することにより、将来的に各時代の「三国志物語」における呼称の変遷実態に焦点を当てた考察を行うことも視野に入れる。

(2)「三国志物語」の抽出

「三国志物語」の呼称データベースをもとに、電子検索を活用した全面的な「三国志物語」蒐集を実施する。電子検索を行うにあたっては、「全宋詩分析系統」、「唐宋史料筆記叢刊」、「元明史料筆記叢刊」、「歴代詩話」、「歴代賦彙」等の漢籍電子データを利用し、呼称データベースに挙がっている全呼称について逐一検索を行う。検索によって抽出された詩文は、作者、詩文名、及び各文献の巻数といった基礎的データと共に順次蓄積を重ねる。呼称データベースに収められている呼称の全てについて同様の作業を行った上で、紙媒体のテキスト、即ち『全宋詩』全 72 巻（北京大学出版社、1998 年）、『全宋詞』全５巻（中華書局、1965 年）、『全宋文』全 360 巻（上海辞書・安徽教育出版社、2006 年）を用いた校訂作業を行う。

(3)抽出資料の読解・整理

電子検索によって抽出された詩文の中には、一読しただけではその意味内容が判然としないものも少なからず存在することから、本段階において緻密な読解作業を行う。また、電子検索の段階では、検出された詩文の中に「三国志物語」と直接関係せず、字面だけが共通している資料も含まれるため、検索資料の選別作業についても読解と併せてこの段階で実施し、不要な抽出資料の除外を行う。

４．研究成果

「三顧の礼」という故事成語で広く人口に膾炙している三顧茅廬故事は、明代に成立した『三国志演義』の中で極めて多くの字句を費やし、非常に印象深い一場面として描かれている。一方で、その原初となる正史『三国志』においては、僅か十数文字の極めて簡素な記述がなされているのみである。この間、千年以上の時間の隔たりを経て、『三国志演義』に見られるような三顧茅廬故事が生み出されるに至った変遷過程は、先行研究においてこれまで明らかにされてこなかった問題である。この問題に対して研究代表者は、宋代詩文中の「三国志物語」を活用の上、(1)三顧茅廬故事の発生と継承、(2)三顧茅廬以前の諸葛亮像、(3)「尋隠者不遇」詩と三顧茅廬故事、という三段階の考証過程を経て、『三国志演義』において集大成される三顧茅廬故事へと繋がる諸要素を見出すに至った。以下、各考証過程における主要な「三国志物語」の資料を列挙する。

(1)三顧茅廬故事の発生と継承

①三国時代

・『三國志』卷三十五・蜀書「諸葛亮傳」
時先主屯新野。徐庶見先主。先主器之。謂先主曰、「諸葛孔明者、臥龍也。將軍豈願見之乎。」先主曰、「君與俱來。」庶曰、「此人可就見、不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。」由是先主遂詣亮、凡三往、乃見。

・『三國志』卷三十五・蜀書「諸葛亮傳」
時左將軍劉備以亮有殊量、乃三顧亮於草廬之中。亮深謂備雄姿傑出、遂解帶寫誠、厚相結納。

・諸葛亮「出師表」（『文選』卷三十七）
臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、遂許先帝以驅馳。

②六朝時代

・僧熊等「答秦主書」(『弘明集』卷十一)
昔巢由抗節、堯許俱高。四皓匪降、上下同美。斯乃古今之一揆、百代之同風。且德非管仲、不足華軒堂阜、智非孔明、豈足三顧草廬。

・徐陵「諫仁山深法師罷道書」(『全上古三代秦漢三國六朝文』全陳文・卷十)
敬度高懷、未解深意、將非帷帳之策、欲集劉侯、形類臥龍、擬求葛氏。黃石兵法、寧可再逢、三顧茅廬、無由兩遇。」

③唐代

・汪遵「南陽」(『全唐詩』卷六百二)
陸困泥蟠未適從　　豈妨耕稼隱高蹤
若非先主垂三顧　　誰識茅廬一臥龍

・李山甫「代孔明哭先主」(『全唐詩』卷六百四十三)
憶昔南陽顧草廬　　便乘雷電捧乘輿

・胡曾「南陽」(『新雕注胡曾詠史詩』卷一)
世亂英雄百戰餘　　孔明方此樂耕鋤
蜀王不自垂三顧　　爭得先生出舊廬

④宋代

・蘇軾「與周長官李秀才遊徑山二君先以詩見寄次其韻二首」其二(『蘇軾詩集』卷十)
孔明不自愛　　臨老起三顧

・黃庭堅「詠史呈徐仲車」(『黃庭堅詩集注』卷一)
諸葛見益州　　釋耒答三顧

・陸游「遊諸葛武侯書臺」(『劍南詩稿校注』卷九)
松風想像梁甫吟　　尚憶幡然答三顧

(2)三顧茅廬以前の諸葛亮像

・『册府元龜』卷二百六「閏位部・禮賢」
諸葛亮、字孔明、隱居南陽時、先主初屯新野。徐庶謂之曰、「諸葛亮孔明者臥龍也。將軍豈願見之乎。」先主曰、「君與俱來。」庶曰、「此人可就見、不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。」繇是先主詣亮、凡三往、乃見。

・『白孔六帖』卷九十五「龍」
諸葛亮隱居。人謂蜀先主曰、「諸葛孔明臥龍也。」

・『禪林寶訓』卷一
眞淨文和尚久參黃龍。初有不出人前之言、後受洞山請。道過西山、訪香城順和尚。順戲之曰、「諸葛昔年稱隱者、茅廬堅請出山來。松華若也沾春力、根在深岩也著開。」眞淨謝而退。

・黃庭堅「宿舊彭澤懷陶令」(『黃庭堅詩集注』卷一)
歲晚以字行　　更始號元亮
凄其望諸葛　　骯髒猶漢相

・黃庭堅「題伯時畫松下淵明」(『黃庭堅詩集注』卷九)
終風霾八表　　半夜失前山
［宋人注］蜀中舊本元作「平生夢管葛、采菊見南山。」言淵明初名元亮、本慕諸葛孔明、有當世志。晚年恥屈身異代、始自放於山林也。

・辛棄疾「賀新郎」(『稼軒詞編年箋注』卷二)
把酒長亭說。看淵明風流酷似、臥龍諸葛。

・辛棄疾「玉蝴蝶」(『稼軒詞編年箋注』卷四)
儂家、生涯蠟屐。功名破甑、交友搏沙。往日曾論、淵明似勝臥龍些。

・謝枋得「菊」(『疊山集』卷一)
淵明豈但隱逸人　　淵明素懷諸葛志

(3)「尋隱者不遇」詩と三顧茅廬故事

・丘爲「尋西山隱者不遇」(『全唐詩』卷一百二十九)
絕頂一茅茨　　直上三十里
扣關無僮僕　　窺室唯案几

・賈島「尋隱者不遇」(『賈島集校注』附集)
松下問童子　　言師采藥去

・王建「尋李山人不遇」(『全唐詩』卷三百)
山客長須少在時　　溪中放鶴洞中棋

・許渾「與張道士同訪李隱居不遇」(『丁卯集』卷上)
千巖萬壑獨携琴　　知在陵陽不可尋

・岑參「草堂村尋羅生不遇」(『岑嘉州詩箋注』卷七)
門前雪滿無人跡　　應是先生出未歸

・陸游「訪客不遇」(『劍南詩稿校注』卷九)
風急斜吹帽　　泥深亂濺衣

・竇鞏「尋道者所隱不遇」(『全唐詩』卷二百七十一)
欲題名字知相訪　　又恐芭蕉不奈秋

・杜荀鶴「訪道者不遇」(『杜荀鶴文集』卷一)
題詩留姓字　　他日此相親

・韋應物「休假日訪王侍御不遇」(『韋應物集校注』卷五)
九日驅馳一日閑　　尋君不遇又空還

・『三國志平話』卷中
獨跨青鸞何處遊　　多應仙子會瀛洲
尋君不見空歸去　　野草閑花滿地愁

・無名氏「諸葛亮博望燒屯」第一折(『全元戲曲』第六卷)
則今日直至臥龍岡訪孔明、走一遭去。獨跨蒼鸞何處游、神仙多管赴瀛洲。訪君不遇空回首、若的那野草閑花滿地愁。

・嘉靖壬午本『三國志通俗演義』第八卷「玄德風雪訪孔明」
正値風雪滿天、回望臥龍崗、悒怏不已。後人有詩、單道風雪訪孔明。其詩曰、一天風雪訪賢良、不遇空回意感傷。……。又詩曰、見說南陽隱士賢、相邀不見又空還。……。

・『新刻校正古本大字音釋三國志傳通俗演義』第四卷「玄德風雪訪孔明」

見說南陽隱士賢　　相隨不見又空還
・『日本藏夏振宇刊本三國志傳』第四卷「玄德風雪訪孔明」
見說南陽隱士賢　　相隨不見又空還
・吳觀明本『李卓吾評三國志』第三十七回「玄德風雪訪孔明」
見說南陽隱士賢　　相隨不見又空還
・『三國志通俗演義史傳』第四卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽賢士隱　　相尋不遇又空還
・『雙峰堂批評三國志傳』第七卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽賢士隱　　相尋不遇又空還
・『三國史傳評林』第七卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽賢士隱　　相尋不遇又空還
・『三國志傳』第七卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽隱士賢　　相尋不遇又空還
・『重刻京本通俗演義按鑑三國志演義』第七卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽隱士賢　　相尋不遇又空還
・『喬山堂本三國志傳』第七卷「玄德風雪訪孔明」
見說南陽賢士隱　　相尋不遇又空還
・『鼎峙三國志傳』第七卷「劉玄德風雪訪孔明」
見說南陽隱士賢　　相尋不遇又空還

以上の「三国志物語」に関する諸資料のうち、特に宋代のものについては、何れも本研究課題を遂行する中で新たに看取できたものである。そして、本研究の成果としては、概ね以下の三点を挙げることができる。一点目は、廬を出て劉備に仕える以前の諸葛孔明に対して、宋代以降次第に隠者としての形象が付与され、更に陶淵明像との融合が図られてきたことを明らかにし得た点である。二点目は、唐代に数多く詠まれた「尋隠者不遇」詩が、『三国志演義』の中で描かれている三顧茅廬故事と密接な関連性を有していることを実証するに至った点である。三点目は、「尋隠者不遇」詩の『三国志演義』への流入実態から、現存する最も古い版本である嘉靖壬午本『三国志通俗演義』をはじめとする二十四巻本系諸本よりも、二十巻本系諸本の方が、所謂「旧本」と称される原『三国志演義』に一層近い存在であるという、『三国志演義』の成立に関わる版本問題について、従来の学説を裏付けるに足る新資料を見出すに至った点である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 角谷聰、「三国志物語」の形成―三顧茅廬故事を中心として―、中國中世文學研究、査読有、第 57 号、2010、107－126

〔学会発表〕（計１件）
① 角谷聰、「三国志物語」の形成―三顧茅廬故事を中心に―、中国中世文学会　平成 21 年度大会、2009 年 10 月 31 日、広島大学

６．研究組織
(1)研究代表者
角谷　聰（KAKUTANI　SATOSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90444182

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：